

2012年10月5日

シンポジウム・研究ネットワーク基金によるワークショップ
実施報告書

総合政策学部4年 高須賀智章

- ・研究題目：淡江大学及び国立政治大学（台湾）との研究交流会
- ・日時：2012年9月18日～9月20日
- ・場所：台湾・台北
- ・参加者：慶應義塾大学側：教員1名、職員1名、学部生5名
淡江大学側：教員1名、大学院生4名
国立政治大学：教員1名、大学院生9名

・概要：

9月18日に淡江大学国際事務・戦略研究所の李大中准教授及び大学院生との懇談会を、19日に国立政治大学で石原忠浩国際関係中心准教授及び日台関係を勉強している大学院生との意見交換会を行った。

本来の予定では18日～20日まで台湾に滞在した後、北京へ移動し在中国日本国大使館の方々と日系企業の中国支局で働かれている方々からお話を聞かせて頂き、22日に帰国する予定だった。しかし尖閣諸島問題を巡る日中関係の悪化により、中国各地で反日デモが過激化していたこと、また9月18日が柳条湖事件のあった日という理由から北京での大規模なデモが計画されているという情報があったことから急遽北京への渡航をキャンセルし、台湾のみの活動となった。

今回の懇親会及び意見交換会の主な目的は、台湾側からの視点を学ぶことで昨今の日中台関係をより深く理解することである。現在研究会では主に日本の中国・台湾研究者の著作を読み、日中台関係を勉強している。しかし普段の研究会だけでは中国・台湾側の視点を学ぶことが難しく、一方向からの視点になりがちである。これまで現代中国・台湾に関する様々な論文を読み進めていく中で感じた私たち学生の共通の問題意識は、日本、更には国際社会が中国という他者を理解できていないという点である。現在の日本・中国・台湾の関係は、経済面や日常生活面での相互依存関係がますます深まっている反面、尖閣諸島問題に始まる相互不信に見られるように、日本人の中国に対する親近感や信頼感は極めて低く、その逆も同じであるというのが現状である。そこで今後中国・台湾と向き合っていくためには、実際に現地へ足を運び自分たちの目で現代の中国・台湾を見ること、また双方が意識的に対話と交流を行っていくことが必要不可欠と考えた。そこで今回、台湾の台北を訪れ、淡江大学国際事務・戦略研究所の方々や国立政治大学の日台関係研究を行っている方々と意見交換を行うことで中国・台湾と日中台3国関係について多角的に理解するための手掛かりを模索したいと考えた。

(1) 淡江大学国際事務・戦略研究所の李大中准教授及び大学院生との懇談会について



9月18日に淡江大学国際事務・戦略研究所の李大中准教授及び大学院生との懇談会を行った。ちょうどこの日の朝に、台北でも反日デモが起きたようで（私たちはまだ到着していなかった）、尖閣諸島問題を中心に日中台関係についてのディスカッションを行った。会話は中国語と英語で行った。

(上：懇親会後の記念撮影)

(2) 国立政治大学の石原忠浩国際関係中心准教授及び日台関係を勉強している大学院生との意見交換会について

9月20日に国立政治大学にて、石原忠浩国際関係中心准教授及び日台関係を勉強している大学院生との意見交換会を行った。石原忠浩准教授は政治大学で台湾側の視点から日台関係を研究されている方で、私たち慶應義塾大学の学生は事前に先生の著作を読み予習をした上で、30分間石原先生による日台関係の講義を受けた。その後40分間程の時間を使い、政治大学の大学院生との意見交換会をし、最後にフリーディスカッションを行った。

石原先生の講義と学生同士の意見交換会・フリーディスカッションを通じて、台湾の私たち側の視点から見た尖閣問題を学ぶことができ、非常に有意義なものとなった。



(左：意見交換会後の集合写真、右：石原忠浩先生による講義の様子)

・総括：今回は残念ながら急遽北京行きをキャンセルすることとなったが、台湾の学生と交流する機会が持てたことは、今後日中台関係を学ぶ上で非常に有意義なものとなった。多角的な視点を学び、今後の勉強に活かすという今回の目的を達成できたと考えている。

以上